

疎開学園で亡くなった学友

太宰府市 吉嗣 美津子

ブラインドを下ろした暗い灯火管制下の列車は、闇の中を走っていた。みんな無言で疲れきっている。私の手荷物は防空頭巾と救急袋だけであった。目をつむると、3日前の恐ろしい空襲の様が思い出された。

昭和20年5月31日、台湾統治の中心地、台北は米軍機の空襲を受けた。

前年の台湾沖大海戦で敗れて以来、台北は度々空襲を受けていた。当時台北師範学校に在学し、寮生活をしていた私たちは、警戒警報のサイレンが鳴ると夜中でも直ちに起きて防空頭巾を被り、防空壕に避難しなくてはならなかった。サーチライトに浮かぶ敵機の姿を何度見たことか。

そしてその日は、重要施設が多く空襲の危険が多いこの地から、台湾中心部の山間地、台中州草屯街双冬に学園疎開をする前日であった。珍しく警戒警報のサイレンが鳴らないまま朝を迎えていた。荷物運搬のトラックが来るというので、布団袋や衣類を詰めた柳行李を部屋から前庭に運び出していた。

午前9時頃であったか、サイレンが鳴りだした。間もなく空襲警報に変わったが、たいしたことはないだろうとたかをくくっていた。隣にある付属小学校の玄関ホールに積んであった土のうの陰に退避した。

しかし、その日はいつもと違っていた。編隊を組んだ敵機はぐんぐん近寄って来るではないか。ドガンドガンという爆弾の音も近づいて来た。私たちは慌てて土のうの陰からとび出ると、近くの防空壕にとび込んだ。壕の中には水が溜まっていたが、そんなことにちゅうよしてはいられない。手で目と耳を抑えてうずくまった。

頭の上からシュルシュルシュルシュル…という摩擦音が聞こえる。続いてグワンと腹に響く爆弾の炸裂音。地響きとともに防空壕の入り口の扉がガタガタと音をたて、パーツと土煙が舞い込む。爆風でグッと胸が締め付けられる。「おかあさん」。下級生の1人が泣き出した。私も叫び出したい衝動をぐっところえていた。雨が降り注ぐようにシュルシュルという音が続く。あのシュルシュルが地面に届いた時、私の姿はもうなくなっているかもしれない。今、父や母は、どこでどうしているだろうか。そんな思いがフッと胸をよぎっていった。

何時間たったのか、爆音が遠のいていた。防空壕から首を出した時、辺りは黄色い砂塵が立ち込め、目の前の寮はその殆どが破壊され尽くしていた。寮の向うの官舎街も一面瓦礫の山となり、廃墟と化していた。僅か20m程しか離れていなかったのに、私たちが入った壕は奇跡的に無事だった。当座の着替えを詰めたリュックサックだけが、瓦礫の下になってしまった。

飛んで来た瓦や石ころ、木片で埋め尽くされた道路をガラガラと荷車やリヤカーに荷物を積んで、郊外へ郊外へと避難する人々が続く。垂れ下がった電線の間には、雀までが叩き付けら

れて死んでいた。

その夜、校庭にあるコンクリート造りの防空壕で寝ることになったが、昼間の空襲により起きた火災であちこちの空が明るかった。学校から1kmくらい離れた所にある総督府も、窓という窓から凄まじい火災を噴き出している。壕の中に横になっても、爆音やシュルシュルという摩擦音、爆弾の炸裂音が耳の中によみがえってきて眠れなかった。

空襲から3日後、瓦礫の街を歩いて台北駅に向かった。総督府の前の道路は爆弾により大きな穴がボコボコと空いていて、空襲の凄まじかった跡を残していた。

日が暮れてから発車した列車は、暗い中をひたすら南下した。明け方台中駅に着き、そこからは砂糖きびを運ぶ社線の小さな列車に乗った。昼近く着いた草屯からは、トラックの荷台にゆられての旅であった。

疎開地双冬は前も後もバナナ畑が広がる小さな学校であった。まだ仮設の宿舎ができておらず、教室のコンクリート床に藁を敷いてその上に休んだ。肌をべったりくっつけ合って、魚を並べたように寝るしかなかった。台湾の6月はすでに暑さも相当なものである。あまりの暑さに外の藁こづみの上に寝る友だちもいた。

昼間は裏山に炊事用の薪拾いに行く。また交替で天秤棒をかついで、前の川から水を運ばなくてはならない。勉強どころではない。毎日の労働で汗びっしょりになったが、入浴もできない。そのうち、付近にきれいな川があることが判った。私たちは先生を目を盗んで、水浴に行った。

1週間もたった頃から、発熱する友人がポツポツ出てきた。初めは疲労からきた熱だろうと思っていたが、それは恐ろしいマラリアの熱であった。病人はみるみる増えていき、40人が1教室に枕を並べるようになった。この疎開地は電気が来ていなかった。夜は皿に油を入れて、灯芯に明りをつけていた。暗い中で、前の川から汲んで来た水にタオルを浸し、それで額を冷やした。元気な者が交替で夜中も看病を続けた。何枚布団を掛けても止まらない震え、それが止まると40度を越す熱、額のタオルを順番に代えていく。村には乙種の免許を持っているという、台湾人の医師が1人しかいない。特効薬のキニーネも全くない。

ここは水の美しい土地ということで疎開地に選ばれたらしいが、そこはまたマラリア蚊の発生が多い地であった。都会に住んでいる内地人（日本人）には、その知識が欠けていた。

遂には120人もが病に倒れてしまい、3人もの友人が薬も注射薬も氷もないこの地で肉親の看取りもなく息を引き取った。「おかあさん、おかあさん」とうわごとをいながら、先生や友だちに手を握られて…。

なんということだろう。あの空襲にも怪我人一人でなかったのに。戦火を避けてきたこの地で3人もの尊い命を失うとは。

私たちは終戦の詔勅も知らないまま、1日遅れて戦いの終わったことを聞いた。



自活農園にて（運動場を耕した）